シリーズ

発達に違いのある子どもたち

幼児期のことばの育ち（後編）

広報うと7月号では話しことばの発達について、9月号では食べる機能の発達についてお伝えしました。

今月号では「わかることば、わかることがら」をどのようにはぐくんでいけば良いのかをお話しします。

ことばには「概念」がある

「まいすてっぷ」には、ことばの遅れで通所されているお子さんがたくさんいらっしゃいますが、ことばが遅れる原因はとても複雑で、絵カードなどで物の名前を言わせるだけでは、ことばはなかなか使えるようにはならないものです。

「ことばのビル」の図でいえば、話しことばはビルの最上階にあり、その下の階にある土台となる部分を一つ一つ満たしていくことが、結果的に生きたことばが言えるようになるための必要条件となります。

「ことばをたくさん知っていること＝さまざまな場面に即してことばを使えること」ではないので、コミュニケーション能力のあるお子さんに育てるには、ものの名前を知ると同時に、そのことばの「概念（共通する特徴）」を理解していくことがとても大切です。

例えば「ねこ」ということばを聞いて、私たち一人一人が想像する「ねこ」は、全く色も姿形も同じものでしょうか？ある人は黒い太った「ねこ」、ある人はシマシマの痩せた「ねこ」というように、それぞれの経験の中で印象の深い「ねこ」が頭に浮かぶのではないでしょうか。　見た目が違うものを、私たちは自然と「ねこ」という脳内の引き出しに分類しています。「ねこ」は4本足で、ニャーと鳴いて、フワフワの毛が生えてて、耳が三角で、シッポがあって…という共通の特徴、いわゆる「ねこ」の「概念」を持っているからことばが伝わるのです。

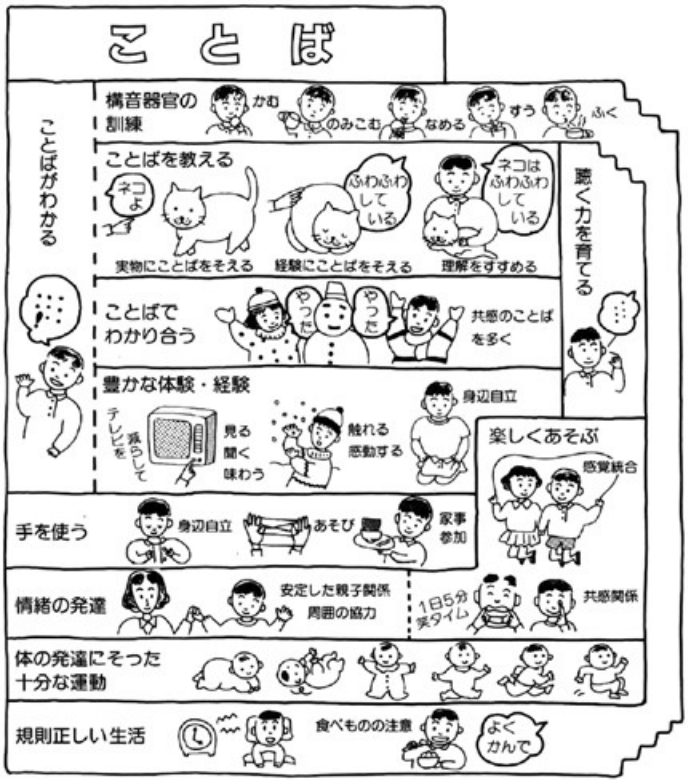
ことばをはぐくむには

では、子どもの脳に、どのようにして「概念」の引き出しを作っていくのでしょう。それは「ことばのビル」の土台の部分を満たしていくことでもあります。子どもはことばを言えるようになる前に、まず、そのことばがわかるようになります。わかるようになるためには、日頃の生活の中で、見たり聞いたり触ったりの五感を通し、そのものの特徴を知っていく体験が必要です。

歯ブラシを見れば口に持っていく、靴を見れば足を入れようとするなど、ものの特徴に合った行動（わかることがら）が増えていくことが、わかることばを増やし、言えることばを増やしていくことにつながります。

この「概念」づくりは、9月号でお伝えした離乳食の時期にはすでに盛んに行われており、赤ちゃんが食べものや身の回りのものを口に入れ、舐めたり噛んだりする中で、そのものの硬さ、柔らかさ、味や匂い、温かさ、冷たさ、滑らかさ、ザラザラなどを体験し、脳の「概念」の引き出しに蓄えています。

「わかることば、わかることがら」が増えると、氷山のてっぺんにある「言えることば」は自然と増えていきます。しかしそこには、周囲の大人による適切な環境づくりが大きく影響します。規則正しい生活の中で情緒を安定し、子どもが自分でできることを増やしていくこと、家族との楽しいひとときの中で、気持ちを共有し共感すること、大人はゆっくり優しい口調で話しことばのモデルを示すことなど、普段の生活の繰り返しの中に、子どもがつい、ことばを発したくなるような豊かな環境を準備していくことが、一番の早道かもしれません。



ことばのビル

文書寄贈
NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてっぷ」

参考文献・挿絵
ことばをはぐくむ／ぶどう社／中川信子著